

カリストス・ウェア府主教の講演録で、今月号で終わりになります。私たちが聖体礼儀のたびに献げているものとは？ その理解が深められていきます

道央宣教セミ・ブロック機関紙

(札幌・小樽・苫小牧)

## 会 報

2024.2.1. No.405

札幌ハリストス正教会 発行



小樽ハリストス正教会

発行責任者 管轄司祭 エフREM後藤悠太

〒062-0042 札幌市豊平区福住2条2丁目3番1号

TEL:011-852-5644 FAX:011-856-0818

郵便振替 02790-8-4469

<http://www.orthodox-jp.com/sapporo/>

E-mail haris-sp@bz01.plala.or.jp

司祭は自分の舌を貸し、自分の手を提供しているに過ぎない、という金口イオアンの言葉を考える時、私は最近起きたある出来事を思い出します。それは、私がオクスフォードを出て、他の都市に行って聖体礼儀を行わなければいけなくなった時のことです。私は直前に転んで手を骨折しましており、残された一本の手では聖体礼儀を執り行うことも、ご聖体を授けることもできない、という有様でした。私が教区にたどり着くと、その教区の司祭は悲嘆に暮れていました。彼は全く声が出なくなってしまっていたからです。この日の聖体礼儀に限っては、私たちのうち一人が舌を貸し、もう一人が手を提供することになりました。

それでは四つ目のポイント、「一切を代表して、一切のために(衆のため一切

のために)」に移りましょう。このフレーズには様々な翻訳の可能性があり、実際様々な翻訳がなされてきました。そのこと自体は必ずしも悪いことではありません。というのも、どの翻訳についても真実の一端を体現していることには違

いないからです。「一切を

代表して on behalf of

all」と訳すこと

も可能ですが、

より正確な訳は

「一切に応じて

according to all、一切に従って in accordance with all、一切と協調して in harmony with all、一切と一致して in union with all」といったものになるのでしょうか。つまりこのフレーズの意味するところは、「一切が含まれ、一切が包括されている」ということなのです。簡潔な翻訳を望まれるのであれば、「一切において in all」が一番良い翻訳なのではないのでしょうか。「一切のために for

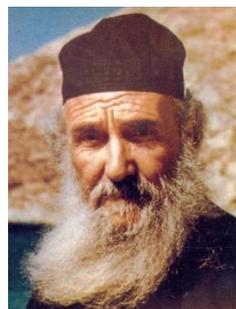
## 心を尽くし感謝して 世界を神に献げ返す(4)

all」ということに話題を移せば、これは良い翻訳だと言えます。そこには、「一切が理由で on account of all」という意味もあります。では、「一切」とは何なのでしょうか。ギリシャ語では、「全ての〈人々〉を代表して、全ての〈人々〉のために」とは書かれていません。ここで「一切」にあたるギリシャ語は中性名詞ですから、「全ての〈もの〉において、全ての〈もの〉のために」という意味になります。当然、〈もの〉の中には私たち人間も含まれます。しかし、私たちは聖体礼儀を全ての人類において、もっぱら人類においてのみ献げる、という訳ではありません。聖体礼儀においては、一切のものが神に献げられるのです。聖体礼儀の献げものとは、宇宙をも巻き込み、環境的をも巻き込んだ献げものであり、一切を包含し、一切を包括しています。

「東方教会のある修道士」という名義で著作を書かれているレフ・ジレ神父の言葉を引用させてください。大連祷にある「全世界の安和のために」というフレーズの注釈です。このように書かれています。「私たちは全宇宙の安和のために祈る。人類のためだけではなく、全ての被造物のため、つまり動物、植物、星、全ての自然のために祈る。それによって、私たちの信仰心 piety は宇宙的な次元へと広がる。そうして、神が存在を与えられた全てのものと私たちとが調和していることに気づかされるのである。」この文章は、聖ヴラジミール神学院出版局より出版された『喜びをもって主に仕えよ』という小冊子からの引用です(※日本語の翻訳は出ておりません)。私はこの本を強く勧めています。(私達と世界との)関係性ということについて分かりやすく、私達の心に訴えるように書かれています。この本は、そのような類書の

中で最良なものの一つです。

聖体礼儀を執り行う際、また聖堂から出て「聖体礼儀後の聖体礼儀 the liturgy after the Liturgy」にとりかかる際、心に留めなければいけないことがあります。それは、私たちは世から救われるのではない、世と共に救われるのだ、ということです。私たち人間は自然の「外に」いるではありません。また自然の「上に」立っているのでもありません。そのため、この公会のテーマである「一切において、一切のために(衆のため一切のために)」というフレーズを考える時、私たちは環境に対して責任を負っていることを思わずにられません。私たちはハリストスと共に聖体礼儀を司祷する者です。私たちは、ハリストスにおいて、ハリストスを通して、万物の祭司として振る舞っています。私たちは献げる者として、天体と天体をまたがる存在です。あらゆる一切が神に献げ返されます。ですから、聖体礼儀が行われている間、聖体礼儀が持っている、環境にまで及ぶ広範囲の意味合いがあることに思いを馳せましょう。ロバート・フロストが発した厳しい警告を忘れてはいけません。彼は、一つの大陸を破壊するのに大して時間はかからない、と書いています。私たちはそこに、一つの惑星ですら全体を破壊するのに・・・と付け加えることができるでしょう。個人的に、聖体礼儀を行う際に思い起こすことがあります。それは、パトモス島の師父アンフィロヒオスがかつてよく言っていた言葉です。私は修道請願し、神学者聖イオアン修道院に受け入れられたのですが、



パトモスの聖アンフィロヒオス

神学者聖イオアン修道院



その時にパトモス島の霊的な師父であった方です。彼はよく言っておられました。「知っているか。神は聖書には記されていないもう一つの誠めを私たちに与えてくださった。その誠めとは『木々を愛しなさい』ということである。」師父アンフィロヒオスは、木々を愛していない者は皆、ハリストスをも愛していない、ということに確信をもっておられました。農民たちが彼のもとに痛悔するために来ると、彼は悔い改めを促すために木を植えることを課しました。そして彼らが課されたことを守っているだろうか、ほどよく木に水をやっているかどうか、山羊から木を守っているかどうか、ということを確認するために、彼は時折見回っていました。ドストエフスキーのゾシマ長老はこのように言います。「神が創られたすべてのものを愛しなさい。その全体も、一粒一粒の砂も。葉の一枚一枚、神の光の一筋一筋を愛しなさい。動物を愛しなさい。植物を愛しなさい。あらゆる物を愛しなさい。」(亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟 2』p451)あらゆる物を愛するということは、もちろん人だけを愛するということに限りませんが、やはりとりわけあらゆる人々を愛するということを意味します。「一切を代表して、一切のために(衆のため一切のために)」というフレーズの真の意味とは、このようなことなのです。

聖マリヤ・スコプツォヴァ



しかし、この言葉を具体的に、実践の場で実行に移さないならば、宇宙的な献げものについてどんなに言葉を尽くそうとも、それはただただ感情的なものに終わってしまいます。母マリヤ・スコプツォヴァの言葉を私たちは忘れてはいけません。彼女はラーフェンスブリュック強制収容所のガス室で1945年に致命者として死んでいます。彼女はこのように書いています。「最後の審判の時には、私はどれだけの苦行を成し遂げられたかどうか、あるいは何度伏拝したかという回数を問われることはないであろう。しかし、私が飢えている者を食べさせたか、裸である者を着せたか、病人や囚われている者を見舞ったか、ということは問われるであろう。私が問われるのは、ただそれだけである。」

聖体礼儀とは、絶え間なく続く神秘です。皆さんはこのように尋ねるかもしれません。「どうしたらこの絶え間なく続く神秘に私たちも加わることができるのでしょうか。」「どうしたら、このような深淵な神秘、力ある神秘をさらに生き生きとしたものとして体験することができるのでしょうか。」それに対しては一つの答えしかありません。つまり、「心を尽くして、感謝して、この世界を神に献げ返しましょう」ということです。この世と共に、自分自身を神に献げましょう。私たちの自己献祭を、ハリストスの自己献祭へと結びつけましょう。この献げものを、一切において、一切のために献じましょう。そうすれば、私たちの生き方は神秘へと変容することでしょう。

(終わり)

## 札幌教会の降誕祭



札幌教会では、本来の教会暦である1月7日から繰り上げて、12月23日(土)に降誕祭の徹夜祈り、翌24日(日)に聖体礼儀が行われました。

降誕祭の徹夜祈りは、晩堂大課から始められました。「神は我等とともにす」と何度も歌われました。それは、イエスが人としてお生まれになり、私達の中に住まれ、そして今も私達と共におられるという降誕祭のまさにテーマでもあります。

翌日の聖体礼儀には60名近くの方が参拝されました。後藤神父は「宿泊する場所もなく、洞窟でイエスはお生まれになった。神の子であるお方が貧しさの中で、幼子という弱さの中で、圧倒的な謙遜さの中でお生まれになった。しかし、これこそが真実の愛である。」と説教し



ました。

また新型コロナウイルスも落ち着いたため、久しぶりに祝賀会を開くことが



できました。皆でオードブルを食べて歓談し、また先日セラフィム府主教座下が着座された際のニコライ堂の着座式の模様をビデ

オで放映しました。その後、祝賀会の開会挨拶を教会学校の3名のお子さんが行ってくれました。婦人会の皆様と子供たちで、紙芝居『クリスマスってなあに?』を上演し、あの北海道ファイターズで有名な「キツネダンス」を有志の皆さんで踊りました。また、聖歌隊の方々は事前に練習した聖歌ケドロフの天主経やシメオンの祝文を披露してくれました。祝賀会にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。

## 婦人会だより

4年ぶりに降誕祭の祝賀会が開かれました。準備や後片づけにたくさんの方が協力して下さり、降誕祭を祝うことが出来ました。また、お菓子、手作りのケー

キ、ピロシキ、果物、ワインなどの差し入れがあり、とても豪華になり皆さんに喜んでもらえました。ありがとうございました。(パラスケワ中野良恵)

## 苦小牧教会の降誕祭



1月7日(日)当日に、苦小牧教会で降誕祭の聖体礼儀が行われました。病気をされている方やご高齢の方がいらっしゃり、残念ながら苦小牧教会は参拝される方が減っているのですが、この日は幸いなことにいつもよりも多くの方がいらっしゃり、共にハリストスの降誕をお祝いすることができました。神に感謝！

## 旭川顕栄会の降誕祭

1月14日(日)、旭川のやわらぎ斎場神居で旭川顕栄会の降誕祭を繰り下げして行いました。札幌教会のバルメン傳法兄に聖歌、誦經の奉仕をしていただきました。旭川や旭川近郊からいらっしゃったのは2名しかおりませんでした。確かに聖体礼儀のあるところに教会がありました。



## 2月15日は迎接祭

それから、モイセイの律法による彼らのきよめの期間が過ぎたとき、両親は幼な子を連れてイエルサリムへ上った。それは主の律法に「母の胎を初めて開く男の子はみな、主に聖別された者と、となえられねばならない」と書いてあるとおり、幼な子を主にささげるためであり、また同じ主の律法に、「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定めてあるのに従って、犠牲をささげるためであった。

(ルカ 2:22-24)



めて開く男の子(=初子)はみな、主に聖別された者と、となえられねばならない」という律法を成就するためです。イイス

スは神です。私達に律法を授けられたお方です。そのお方が自ら律法を守られました。それは一見奇妙なことでしょうか。一体なぜなのでしょう。

イイススが律法をあらゆる点において成し遂げられました。それは、イイススを受け入れた者が皆、イイススにあって律法を成し遂げる

ためです。

2月15日は、迎接祭の聖体礼儀を行います。主イイススが神殿に献げられたことが記憶されます。

ルカ伝によると、幼子イイススは生まれて40日後に神殿に連れていかれ、神に献げられました。それは「母の胎を初